

カンキツのツノロウムシに対する各種薬剤の防除効果

カイガラムシ類に対して**有効な薬剤（スプラサイド剤）**が登録失効したことを受け、これまでもツノロウムシに対する代替剤の効果を検証してきているが、試験事例の積み上げを行うため、継続して効果の検証を行った。

■ ツノロウムシの生育ステージと被害



図1 各試験区全体の処理前の割合

◆ 生態的特徴

- ✓ 年1化性（1齢幼虫は6月下旬～7月上旬の発生）

◆ 被害の特徴

- ✓ 吸汁による枝枯れ等の樹勢低下
- ✓ すず病の発生による果実被害



■ 薬剤試験（令和7年7月13日実施）

試験方法：愛媛県試第48号の寄生枝をマーク（1区1樹4調査枝）し、齢期別に計数した。
その後、各種薬剤を背負い式動噴で7月13日に各樹（1区2樹）に十分量を散布した。
散布から55日後（9月6日）に齢期別（3齢・雌成虫）に計数した。

品目：かんきつでの対象病害虫の登録は以下のとおり

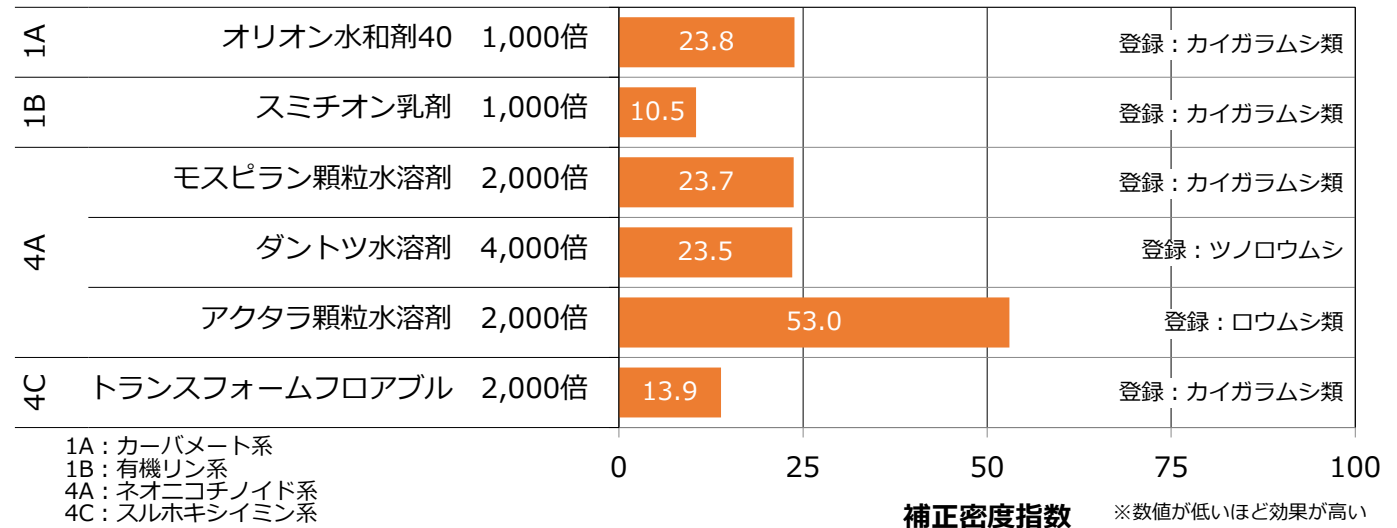


図2 ツノロウムシに対する各種薬剤の防除効果

- ・スミチオン乳剤、トランスフォームフロアブルは効果が高かった。
- ・オリオン水和剤、ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤は上記2剤より効果は劣るものの、比較的效果があった。
- ・アクタラ顆粒水溶剤は他の薬剤に比べて効果が低かった。

今後の課題

- ・ロウムシ類の発生は年1化性で、薬剤試験が年1回のみとなるため、継続した試験実施が必要である。
- ・カイガラムシ類に登録のある各種薬剤について、齢期により効果が異なるため、再度、検討を行う。

- 注意点：ロウムシ類は年1化性であるため、多発園では6月下旬～7月上旬の防除適期を逃さずに防除を実施してください。マシン油乳剤の効果は低いので、若齢時（1～2齢）の防除が主体となります。